

# 日本人短期留学者が理想とする英語話者のイメージと留学中の言語実践について

北野知佳(立命館大学 言語教育センター)

## 1. はじめに

2000年代以降、語学習得のみならず、グローバル人材育成の実践教育の場として留学が推進され、1ヶ月に満たない「超短期留学」(Shimmi & Ota, 2018)が注目されてきている(子島・藤原 2017)。高等教育においては、協定等に基づく英語圏留学のうち、1ヶ月前後の超短期・短期留学参加者数は最も多い。「平成29年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査」(日本学生支援機構 2019)によると、1ヶ月までの超短期留学者数は日本人の全留学者数の7割を占めている。とりえずお試しで、という軽い動機づけが奨励される風潮にある。その結果、留学先でどのような英語話者と交流を図りたいかの具体的なイメージを持たないまま参加する日本人短期留学者は多い(Kubota, 2016)。漠然としたイメージとして、クボタ(2016)は、英語圏へ留学すれば、英語を母語とするネイティブスピーカーと話すことができるという想像(スタディアブロードイマジナリー, study-abroad imaginary)を日本人学生は描きやすいことを指摘している。

## 2. ネイティブスピーカリズム

ネイティブスピーカーとは、英語を母語とする話者とされるが、具体的には、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアとニュージーランドの国々、いわゆる Inner Circle(Kachru, 1985)の英語を母語として話す者とされる。Kachru(1985)は、Inner Circleの他に、英語が第二言語として扱われる Outer Circleの国々や、英語が外国語として扱われる Expanding Circleの国々をあげ、英語や英語話者の属性を分類した。この3つの英語圏に関して、Inner Circleの英語をネイティブ英語と称し、その他の英語をノンネイティブ英語とする二項対立に対するイデオロギーの問題が、長年多くの研究で議論されてきた。特に、グローバル化社会では多言語環境で生活する英語話者もますます多くなり、ネイティブスピーカーとは実体のない存在であり、単一的な理想化された想像上の英語話者であるとして批判的議論も多くなされている(Saniei, 2011)。しかしながら、日本においては、ネイティブスピーカーを英語話者の理想モデルとして盲目的に信仰するネイティブスピーカリズムが、英語教育場面で当たり前のように見られる。例えば、大学における英語科目のシラバスで、ネイティブという言葉が用いられ、英語教員採用の項目の中で、ネイティブ話者であることが条件として提示されることがいまだに多い。留学場面でも、英語圏ではインナーサークル (Inner Circle) への留学が最も多く選択されており、クボタ(2016)が指摘するように、日本人留学者は、留学先での理想的な英語話者としてネイティブスピーカーを想定しやすい環境にある。

以上を踏まえ、本研究では、日本人短期留学者が留学前に、どのような理想の英語話者を想定し、留学前の英語話者へのイメージは、留学先での言語実践にどのような影響を与えうるのか社会的見地から考察を行った。また、Inner Circleに属する英語間に見られる言語学的あるいは文化的差異が、英語学習者からどのように認識されているのか、それがどのように英語学習の動機付けにつながっているのか考察した研究は少ない。よって、本研究では、オーストラリアとイギリスへの留学者を調査対象とし、それぞれの日本人短期留学者の語りを比較した。

## 3. 調査対象者と調査方法

本調査は、2014年8月の約1ヶ月間のイギリスの短期留学プログラムに参加した学部学生(7人:女5人,男2人)と、2018年2月の約1ヶ月間のオーストラリアの短期留学プログラムに参加した学部学生・大学院生(7人:女2人,男5人)を対象とする。前者については留学前と留学中、留学後に一对一の対面で半構造化インタビューを行い、後者については、留学前と留学後に半構造化インタビューを行い、留学中にはメールにて自由記述式のアンケートを実施した。いずれのインタビューも、大学のオープンテラスやカフェなどを利用し、すべてのインタビューデータは、インタビュー者の了承のもと録音し、著者がテープ起こしを行なった。表1がインタビュー者のリストとインタビュー実施日である。いずれのプログラムも、大学で提供された単位取得型の語学向上を目指したプログラムであった。イギリスでの短期留学プログラムは、日本から同プログラムに参加する大学とともに、寮生活を行う形態であり、オーストラリアでの短期留学プログラムは、

ホームステイという形態であった。

表 1. 質的調査 インタビュー어의プロフィール (イギリスの短期留学生, 寮生活)

仮称	性別	年齢	これまでの海外留学経験	インタビュー実施日(2014年) (1回目, 2回目, 3回目)
1) アコ	女性	19	カナダ(2週間)	7月19日(40分), 8月20日(18分), 10月15日(50分)
2) チヒロ	女性	20	なし	7月10日(53分), 8月20日(19分), 10月8日(45分)
3) カイト	男性	19	アメリカ(3週間)	7月11日(53分), 8月20日(21分), 10月14日(61分)
4) ミナミ	女性	19	なし	7月11日(53分), 8月20日(17分), 10月6日(68分)
5) スミレ	女性	21	モンゴル(1週間) ニュージーランド(2週間)	7月8日(55分), 8月20日(18分), 10月24日(40分)
6) ユキ	女性	20	中国(1週間)	7月9日(58分), 8月20日(18分), 10月6日(67分)
7) ユウタ	男性	19	なし	7月10日(42分), 8月20日(22分), 10月8日(57分)

表 2. 質的調査 インタビュー어의プロフィール (オーストラリアの短期留学生, ホームステイ)

仮称	性別	年齢	これまでの海外留学経験	インタビュー実施日(2018年) (1回目, 2回目)
1) スズ	女性	20	ないが, 4歳より英会話に通う	1月31日(49分), 4月4日(61分)
2) ノリカ	女性	19	なし	1月25日(47分), 4月4日(52分)
3) マサキ	男性	19	ハワイ(1週間) オーストラリア(2週間)	2月14日(32分), 3月27日(82分)
4) ゴウ	男性	20	なし	1月26日(38分), 4月12日(45分)
5) ハジメ	男性	23	台湾・香港(2週間)	1月18日(46分), 3月28日(56分)
6) ケンタ	男性	19	なし	1月22日(50分), 4月18日(49分)
7) ヒロ	男性	26	なし	1月29日(29分), 4月5日(51分)

## 4. 結果

### 4.1 イギリスの短期留学生

留学前, 留学先で話したい相手としてイギリスや西ヨーロッパといった西洋圏出身の学生を例として挙げていたインタビュー(カイト, アコ, ユキ)は, 留学先の語学授業で, 他のアジアからの留学生たちの英語力や考え方に批判的な意見を述べる傾向があり, 自ら積極的に, 他のアジアからの留学生と英語を介した言語実践をしようとする試みが見られない傾向があった。また彼らに加えて, ミナミの語りからは, 英語話者=白人というイメージを抱いていることもうかがえた。

一方, 留学前からアジア圏やヨーロッパなどさまざまな英語を介した言語実践を行っていたユウタは, 留学中, 他のアジア圏からの留学生と週末にでかけるなど, 積極的に日本人以外の英語話者と英語を使おうとする姿勢が見られた。また, ユウタに加えて, 留学前から, 英語や西洋一辺倒の考え方に批判的視点を持っていたスミレは, 他のアジアからの留学生たちの語学授業中の積極的な発言に対して肯定的な意見を示した。

### 4.2 オーストラリアの短期留学生

ヒロは, 留学前から, オーストラリアの現地の若者と交流を図りたいと強く願っており, 英米のポップカルチャーに興味を持っていた。一方で, 映画で描かれる日本や東アジアのイメージを例にあげ, 日本やアジアについて否定的な意見を述べていた。ヒロは, 留学中にインド系移民のホストマザーと生活スタイルについて口論となったり, 語学授業のインドネシア出身の教員と口論するといった経験をし, インドネシア系教員の英語の発音について, 訛りがあるとして批判的な語りを行なった。スズの語りからも, 留学前から, アメリカ英語を標準なネイティブ英語と考え, ネイティブレベルで話すことができるオーストラリアの現地の人と仲良くなりたい, とするなど, ネイティブスピーカーが強く見られた。留学経験はなかったものの, 幼少期より英会話スクールに通っており, アメリカ英語以外の英語に対する違和感や, 日本人学生の英文法のミスなどに対して批判的な語りを見せていた。留学中は, オーストラリアの英語発音に戸惑いを見せたものの, 60年近くオーストラリアに住んでいるハンガリー系移民のホストマザーと親交をあつくし, ほとんど毎日々飯を一緒に食べ, 大学で出された課題に協力してもらうなど, 英語での言語実践には, ホストマザーの介入が大きかった。しかし, やはり, アメリカ英語が最も標準的な英語という認識は変わらず, あくまでも, オーストラリア英語は標準語ではないという認識は変わらなかった。

マサキ, ゴウ, ハジメは, 留学前からアメリカ英語に限らず, 多様な英語との接点あり, 留学先で習得したい英語として,

発音の面ではこだわりを見せなかった。留学中は、移民系ホストファミリーとの交流や、日本文化や日本語に興味のあるホスト大学の留学生や日本文化研究のクラブに所属するオーストラリア出身の学生と交流し、週末は一緒に出かけるなど、英語と日本語を介した言語実践が見られた。留学後は、ゴウにいたっては、日本語訛りの英語であってもコミュニケーションをする上では問題ないとするなど、認識の変化が見られた。

## 5. 考察

### 5.1 留学前の英語話者へのイメージが与える留学中の言語実践の影響

イギリスの短期留学プログラムにおいては、留学前に理想とする英語話者へのイメージが、留学中のインタビューの言語実践に与える影響は大きかったと言える。留学前に、理想的な英語話者としてネイティブスピーカーを想定していたインタビューは、留学中の言語実践の場が限られてしまう傾向が見られた。特に、留学形態が日本人との寮生活であったイギリスのプログラムでは、いわゆるネイティブ英語話者との接点は少なく、自ら積極的に多様な英語話者、つまり他国からの留学生に話しかける動機付けが十分でない場合は英語による言語実践を行う機会は必然的に少ない状況であった。クボタ (2016) が述べたように、留学先に行けば英語を母語とするネイティブスピーカーと話することができるという想像 (スタディアブロードイマジナリー, *study-abroad imaginary*) を持ったまま留学先に行くことが、英語による言語実践の範囲を狭める可能性を示唆した。一方、留学前から多様な英語話者との交流を想定していたインタビューについては、留学中に、自ら言語実践の範囲を広げることにつながったと考察できる。

オーストラリアの短期留学プログラムの形態はホームステイであり、ホストファミリーを介しての言語実践の場が、寮生活よりも多くなる傾向が見られた。また、ホスト大学に、日本文化や日本語に興味のある学生が多くおり、自ら積極的に働きかけなくても、留学先で英語話者が話しかけてくるような機会が多くあったことが特徴としてあげられる。このように、オーストラリアの短期留学プログラムでは、ネイティブスピーカーリズムの考えを持っていたり、多様な英語話者との言語実践の動機付けが十分でないインタビューであっても、英語を使った言語実践がイギリスほど限定的ではなかったと分析できる。

### 5.2 Inner Circleに属する英語の差異への認識と英語での言語実践の動機付けについて

イギリスの短期留学では、イギリス英語に対して、「本場」の英語と称したり、留学後にブリティッシュアクセントを目指そうとするインタビューがいたが、オーストラリアの短期留学においては、オーストラリア英語を「訛り」とみなす語が多く見られた。また、両プログラムにおいて、今回の留学に限らず、将来、最も習得したい英語はアメリカ英語、という語が見られたことから、Inner Circle内でもそれぞれの英語の認識に違いがあることが示唆された。また、オーストラリアの短期留学では、今回の留学を通して習得したい英語として、発音にはこだわらず話せるようになりたい、とするインタビューの語りが特徴的であった。このことは、同じ Inner Circle に属する英語でも、オーストラリア英語とイギリス英語に対する認識の差異が、英語での言語実践の動機付けの質に違いをもたらすことを示唆すると言える。

## 参考文献

- Kachru, B. (1985). Standards, codification, and sociolinguistic realism: the English language in the Outer Circle. In R. Quirk & H. G. Widdowson (Eds.), *English in the world: Teaching and Learning the Language and Literatures* (pp. 11-30). Cambridge: Cambridge University Press.
- 子島進・藤原孝章 (2017). 大学における海外体験学習 子島進・藤原孝章(編) 大学における海外体験学習への挑戦 ナカニシヤ出版 pp. 1-16.
- Kubota, R. (2016). The social imaginary of study abroad: complexities and contradictions. *The Language Learning Journal*, 44(3), 347-57.
- 日本学生支援機構 (2019). 日本人学生留学状況調査. 2019年1月 <https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/nippon/data/2017.html>
- Paikeday, T. M. (1985). *The native speaker is dead!* Toronto: Paikeday Press
- Saniei, A. (2011). Who Is An Ideal Native Speaker?! *2011 International Proceedings of Economics Development and Research*, 26, 74-78.
- Shimmi, Y., & Ota, H. (2018). 'Super-short-term' Study Abroad in Japan: a Dramatic Increase, *International Higher Education*, 94, 13-5.